

第1章 ギャル、20歳でママになる



- 1 -

ヒロとの出会い

15歳（中学校3年生）で今の旦那、ヒロと出会いました。

当時、私は、熊本県の人吉市在住。ヒロは福岡市在住。なぜ、そんな二人が出会えたかということ、当時はクラスで10人くらいしか携帯電話を持っていない時代。いわゆるメル友だったのです。

だから、ヒロは、私の初恋の人であり、初めて付き合った人であり、初めてで唯一の結婚相手。

よく「7人の子ども、お父さん同じですか？」と聞かれます。確かに、離婚、再婚を繰り返して子沢山になっていくケースはあります。

私の場合、正真正銘、7人ともヒロの子どもです。

自慢にもなりません、今の所、私の人生における男性経験は、ヒロ一人です。

17歳まで、遠距離恋愛時代を過ごし、私は、高校卒業後、18歳で専門学校進学のため福岡へ。すぐにヒロが私の家に転がり込んできて、同棲生活がスタートしました。

当時の私は、「いつか、この人と結婚するんだろうなー」となんとなく思っていました。

ヒロは、中学を卒業し、人よりも早く社会に出て働いていました。稼ぎもそれなりにありました。

- 2 -

私は赤ちゃん好きだし、彼が好きだし、妊娠しても大丈夫かなと安易に考えていました。特に避妊もしていませんでした。

初めての妊娠、暗い妊婦生活

そして19歳で妊娠。
赤ちゃんができたとわかったとき、まず頭をよぎったのは、「親に怒られる…」。
嬉しいよりも、そればかり、不安ばかりが頭をよぎりました。

福岡に出てきたばかりで、周りは専門学校の友達だけ。周りにママなんていません。相談できる人はいません。

妊娠3ヶ月で親に報告。

「…は？」

「ちょっと待って！」

「…どういうこと？」

「…相手、誰？」

沈黙と、親の涙。

そして、「まさか、産む気なの？」という言葉…。

ヒコの親にも報告したら、無言の涙。
その涙に罪悪感を感じ私もつられて涙。

唯一「おめでとうございます」と言ってくれたのは、産婦人科の先生だけ。ただし、カルテを見ながら…。

誰にも祝福されない、暗い暗い妊婦生活が幕をあけました。

妊娠がわかり、専門学校にはもう行けません。

みんなと遊ぶことも、もうできません。

昼間は少し膨らんだお腹を抱えて、家事、買い物、夜ご飯の支度。それが終わったらあとは、ぼーっとテレビ見るか、昼寝するかの日々。

夜、友達から「遊ばーよ」って誘われても、「お腹の大きい私が遊んじゃダメなんじゃないか」「こんなじゃママになれない」と、私自身がブレーキをかけていました。

友達と遊べないから、「私には友達がいないんじゃないか」と不安になってきます。世の中から孤立した感じがします。

1日が長く、「ヒコ、早く帰ってきて」が口癖でした。

19歳のヒコは、そんな私の気持ちを知る由もなく、夜も遊び回る毎日。

「一緒に遊び行く？」が喧嘩の元。

「行けるわけないじゃん！妊婦だよ！」と、毎日がこんな喧嘩ばかり。

「私、今、頼れるの、あんただけなんだよ！」

呪文のように、毎日、泣きながら叫んでいました。

当時の私は、流行りの服を着て、メイクも濃い目。
つけまつげは3枚。髪は金髪。ピンクのエクステ。いわゆるギャルです。
でも、日に日に大きくなるお腹が邪魔になり、可愛い服は着ることができ
なくなりました。

買うのはもったいない。服は旦那のお下がり。おしゃれは二の次。
友達はもちろん可愛い恰好です。すごい疎外感と劣等感を感じました。

それから、これまで、貯金なんかしたことなかった私。「赤ちゃん育て
るにはお金がいるはず」と、お金を貯めることが最優先となりました。

でも、外食、コンビニ、遊びにと湯水のようにお金を使うヒ口。お金の使
い方も喧嘩の種。

「私のことも考えてよ！」

毎日、泣きながら叫んでいました。

そんな毎日。

そして、「こんなことで、よいお母さんになれるかどうか…」と、不安に
押しつぶされるような毎日を過ごしました。

初めての出産

そして、2007年1月7日。

里帰り出産のために帰省していた人吉市で陣痛が始まりました。でも、親
は来てくれません。

痛みに強い私でも想像を絶する痛み。

「いっそ、殺して」と、つぶやき続けました。

「帝王切開にして」と、お願いし続けました。

この痛みはいつまで続くの…。

そんな私の目の前で、おにぎりとかクワンを食べるヒ口。その臭いで吐き
気をもよおし…。

そして、10時間後。「睦輝」が生まれました。

正直、「やっと終わった…」「涙なんかでんし…」「二度と産まん」と思
いました。

一息ついて、赤ちゃんを胸においてもらいました。

存在の大きさ、小さいのに大きい感じ。自分の命より大切な存在。

私は、一瞬にして母になりました。

二十歳の母になりました。

山口紫織の子育てが始まりました。

悪夢の子育て

もともと赤ちゃんが大好きだった私。小さいころの将来の夢は保育士さんになることでした。

妊娠中は、「赤ちゃん好きだし、子育てもどうにかなるでしょ～」と思っていました。

しかし、いざ出産してみると、次々と予測不可能なことが起こります。

抱っこしないと寝ない、置いたら泣く…。だから結局、抱っこしたままソファで寝る。そんな夜を、何度、過ごしたことが。

やっと寝た子どもを起こさないように、携帯はもちろんマナーモード。玄関のドアのピンポンの音など、生活音のすべてが私の敵だと思っていました。

静かな家で子どもと2人きり…出かけるところありません。

ごはんもトイレもお風呂も睡眠も、不自由。赤ちゃんがいるだけで、こんなにも不自由になるなんて想像もしていませんでした。

カウンターで食べていたラーメンを食べることができなくなる日が来るなんて思いもしませんでした。

まるで私のすべてが赤ちゃんに奪われて、誰かに支配されているような、そんな毎日。

20歳。まわりのみんなは遊んでいます。私は夜出られません。

相変わらず、ヒロは、父親になったという自覚もなく、夜、外に遊びに出かけます。

「あんただけ遊べていいよね！私は遊べないのに！」と喧嘩する日々が続くと、次第に「こんなに毎日つらいのは赤ちゃんのせいだ…！」と思うようになりました。

心から笑えない日が続き、ついに生後2カ月ごろには「少しもかわいいたいと思えない…」。

私の心が悲鳴をあげていました。

赤ちゃんが憎い。

加えて、朝6時に起床して、ヒロのお弁当作り、家事、育児のすべてをきちんとやってきました。やろうとしていました。きちんとやらなければならないと思っていました。

だから、1人目の子育ては本当に辛かったです。

そうしたら、出産後、2ヶ月で2人目の妊娠が発覚しました。さっき出したばかりなのに、もう入ってきました。

再び妊娠して、ホルモンの状態が変わり、イライラしたり、神経質になったり、不安になったり。

2007年の12月に2人目を出産。

1人目が2007年の1月生まれ。だから、1年間に2人も子どもを産んだことになります。

その後がさらに地獄です。家の中に、1歳にもならない1人目と、新生児の2人目がいるわけですから。

実家は遠く、頼る親も友達もいません。

義理の母との同居だったのですが、看護師で、ほとんど家にいません。おばあちゃんが子どもの面倒を見てくれないこともストレス。

どんどん神経質になっていきました。

思いどおりにならないことで、1人目に怒ってばかりいました。今考えれば、虐待すれすれです。

テレビで虐待のニュースを見ながら「子どもがかわいそう」だとか全く思いませんでした。「かわいそうなのはお母さん」と思っていました。「明日は我が身だな…」「明日のニュースには私がでるかも…」と思っていました。

ずっと泣いていました。

「たった一人きり。なんで、私だけこんなに辛いのか…」

「周りのお母さんは、完璧に子育てしてるんだらうな…」

「私だけこんなガミガミしてるんだらうな…」

ママ・コミュニティに救われた！

そんな私を救ってくれたのが、ママの年が近いママ・コミュニティでした。いわゆるギャル・ママコミュニティです。

市民センターや公民館で、ママのサークル活動があっているのは知っていました。しかし、当時の私は、当時の私は、メイクも濃い目、つけまつげは3枚、髪は金髪、ピンクのエクステです。爪が長い。超ミニスカート。当然、そんな場所には馴染めませんし、行けません。

当時は、mixi全盛期。そのmixiに「若ママ・コミュニティ」というのがありました。当時のギャルが、そのまま若くしてママになった人達が集まるコミュニティです。

それに入りました。

そこで、想いを悩みを苦しみを共有することができました。

「こんなしんどいの私だけじゃなかったんだ…」

「子育てで苦しんでいるのは私だけじゃなかったんだ…」

「旦那さんのことで悩んでいるのは私だけじゃなかったんだ…」

それから、子育てが圧倒的に楽になりました。

人とかかわる大事さに気が付き、ガンガン、外に出るようになりました。22歳の頃です。

また、「コミュニティによって、私のように救われるママがいるかも知れ

ない」と思い、積極的にコミュニティづくり、コミュニティ運営に携わるようになりました。

ZEPP FUKUOKAという、巨大なライブ会場を借りて、九州中のギャルママを集めるイベントをやったりもしました。

その頃から、新聞やテレビに取り上げられるようになりました。

その間に、就職しようともしました。しかし、できませんでした。

専門学校でいろいろな資格を取ったのですが、ママになってからいざ働こうと思っても、やはり実務経験がないこと、子どもの人数が多いこと、親が遠くて頼れないこと、子どもが熱を出したら預け先がないことなどを理由に断られました。

パートとして働いてみたりしました。

しかし、つくづく私は、パートとかに向いていないことがわかりました。「なんで、大切な時間を、おばちゃんたちの愚痴の言い合いに使わんといかんの！」みたいな。「お昼、一緒に食べよう」と誘われても、「いや、いいです」と一人でお弁当を食べていました。

では、何をやっていこうかと思ったときに、私の原点はコミュニティ活動。

私みたいな、虐待すれすれで苦しんでいるママがたくさんいるはず。ママ・コミュニティ活動を続け、そうしたママの何らかの助けになればと思いました。

ただ、コミュニティ活動はお金にならないんです。お金にしようと思って、お金にならないからキツクなると分かり、お金にしないと決めました。目の前に困っているママがいれば、その人に目を向けて、困っていれば手を差し伸べる。相談があれば相談にのる。

私、1対1はめっちゃくちゃ強いんです。

「お茶しませんか?」「ご飯しませんか?」と言われれば、行きます。

タイヘンそうなママがいれば「お茶しようか?」と声をかけます。

何になるかわからないけど、それをずっと繰り返していきました。

正直、お茶代もめっちゃかかります。当然、5人も6人も子どもがいれば、お金がかかるし、当時のヒロの給料（手取り）は平均20万円弱。

それでも、お金をのことは、あまり気にせず目の前の困っているママにフォーカスし、そのママが幸せになればいいと、そのきっかけになればいいと、1対1をずっと繰り返してきました。

そうしたら、いつしか、私みたいな人が周りに集まってきました。人のために、時間やお金やエネルギーを出せる人。先に出せる人。

そんなママ・コミュニティができました。

そういう思いを持った人たちのコミュニティだから、ストレスがないんです。

そうして、そんな仲間たちに、今、私が救われています。

その話は、後述します。

第2章 山口家流、ワクラク子育て術

